

暗唱聖句 「しかし今は、わたしたちは、自分を縛っていた律法に対して死んだ者となり、律法から解放されています。その結果、文字に従う古い生き方ではなく、“霊”に従う新しい生き方で仕えるようになっているのです。」

ローマ7：6

---

今週の聖句 ローマ7章

---

今週の研究：ローマ7章はパウロの回心前の経験か回心後の経験であるかについては、学者の間でも意見が異なります。

どの立場をとるにせよ、重要なことは、イエスの義が私たちに覆うこと、また私たちがイエスの義によって神の前に完全な者として立つことができるということです。あらゆる国民、種族、言葉の違う民、民族に、「永遠の福音」を宣べ伝える私たちにとって（黙14：6）、これは理解し、経験しなければならない重要な点です。

---

月曜日：そこでパウロは言います。もし「律法」によって教えられていなかったなら、自分はむさぼることが罪であることを知らなかったであろう、と。

罪は啓示された神の御心に違反することであり、啓示された御心を知らないところには、罪の認識もありません。その啓示された御心を知るとき、人は自分が罪人であって、有罪宣告と死のもとにあることを認めるようになります。この意味において、その人は死ぬのです。

パウロは、律法は必要なものであったが、その機能は限られていたことを明らかにしています。律法の役割は人の罪を明白にし、救いの必要を示すことであって、決して救いを得る手段を提供しているではありませんでした。

---

水曜日：聖霊は、律法を鏡として用いて、人に鏡を見させ、人が神の要求に逆らい、神の怒りの対象となっていることを悟らせてくださいます。罪人はこれらの要求に従おうと望み、律法が良い鏡であり、自分の罪を見せてくれるものであることを認めます。

---

木曜日：「心の法則」は神の律法、神の御心の啓示です。聖霊の導きの下で、パウロはこの律法に同意しました。彼の心はそれを守りたいと望みましたが、守ることができませんでした。なぜなら、彼の体が罪を犯そうと望んだからです。だれもが同じような葛藤を感じているのではないのでしょうか。あなたの心は自分の望みを知っていますが、あなたの肉が他のことを要求するのです。

一つの点だけがはっきりしています。つまり、キリストを離れて、自分自身だけでは、罪に対して無力であるということです。一方、キリストが共におられるなら、私たちにはキリストによる新しい命があります。その中であって、たとえ自我が絶えず出現しようとも、求めさえすれば、勝利の約束は私た

ちのものです。

他人が自分に代わって息をすることができないように、だれでもあなたに代わってキリストに従うことができません。そうすることができるのはあなただけです。それ以外に、キリストによって私たちに与えられている約束を自分自身のものとする方法はありません。

---

今週の学びをしながら、むかし読んだ新聞の4コマ漫画を思い出しました。1人の人が滝に打たれて修行をしています。その滝を、たまたま数名の女性のハイカーが通りかかれます。彼女らは、真剣に修行をしている彼をみて、俳優の〇〇に似ているわねと言いながら去っていきます。彼は滝から出ると、すぐに宿坊で雑誌などでその俳優をさがすというものでした。

人間は、どんなに無我の境地になろうとしても、自らの誉める言葉を喜んだり、必要以上に自分のことを主張したりしてしまいます。

ある説教者が礼拝直後に、ある婦人から「とても良い説教でした」と言われたら、「悪魔の声をかけないで欲しい」と語ったというエピソードを聞いたことがあります。祈りつつ、神さまの聖霊の助けを受けて語ったのに、自分のことだけ誉められることで、人間は神さまからの助けを忘れて、自分への賞賛を受けることが喜びとなります。

パウロが、ローマ7章の後半から自らの率直な思いを語っています。そして「なんと惨めな人間なのでしょう」とまで言っています。

今期の教課の寄稿メッセージを書いている伊能先生は、ここでパウロが「突然、改心前のサウロに変わるということでもあるのでしょうか」と述べていますが、わたしもまったく同感です。

わたし自身のことを思い返しても、若い頃の穴があったら入りたいような失敗も多々ありますが、今でも自らの心を正視したら、このパウロの想いと同じです。

キリスト教は、ここから始まるのです。自分ではどうしようもできない、それだったあなたはどうする？と問われています。その問いに、あなたはどうか答えますか？

そしてこの問いは、クリスチャンとしての歩みを続けているわたしたちにも、常に問いかけられているのではないのでしょうか。